

いち早く人道援助

「ルワンダ内戦」――。応ずるAMDAの活動は設立（一九八四年）以来、今で十二年に及ぶ。その中でルワンダ救援はAMDAの海外援助の一つの原点である。同時に、発展途上国への援助などで「金」だけ出して「顔」が見えない」といわれ、欧米の「専売特許」だ、た人道援助に「日本の顔」をみせたというが、その金が欧米のNGOに多く流れる。それで日本人は「何もしていない」と中傷されたのでは無い。欧米のNGOに負けな活動を展開したい」との気持ちから医療救いを「。さまざま困難な状況の中で活動する三宅さんの実感だ。

「AMDAなどが参加した多くのことを学んだ。イールの難民キャンプでの診療の「陣取り合戦」がし烈だ。三宅さんがルワンダに駆け付けた時、戦闘地域でない安全な場所は既に、欧米のNGOが押さえていた。現地の統治担当者や活動場所を求めた交渉したが、難航。ガラムの病院にたどり着いたのは、日本を出て九日目にもなっていた。「援助だからといって、活動場所を用意して歓迎してくれるのではない。仕事を取ってくる営業活動と同じ。ボランティアでも好きには休めないし、まさにプロ意識が必要だ」という。

日本の顔

日本のNGO（非政府組織）としての初の現地入りだった。「現地の医師が逃げ出し、薬や機器も持ち出された病院。患者たちは、まともな治療を受けられないまま放置されていた」。三宅さんは目の当たりにした惨状を振り返る。

最前線

内戦、大地震……。難民や災害などの発生に機敏に対応している。

同・サハリン地震、インドネシア・スマトラ島地震、ロシア・チェチェン内戦、

意識 AMDAはルワンダから



内戦で傷ついた患者を診察する三宅さん=1994年5月、アフリカ・ルワンダ北部の病院

この連載は読者とともに地域づくりを考える企画です。山陽新聞社「くに」へ「熱き人々」取材班（電話086-244-6779、ファクス086-244-4923）まで、ご意見、ご感想をお寄せください。

「医療プロジェクトを行う「特殊なエキスパート」と思われがちだが、その理念は「市民レベル、日常レベルの相互扶助思想」と三宅さんは強調する。「簡単に言う」と困った時はお互い「さあ」といって」である。

経済的に豊かでも人的な協力は可能。AMDAでは援助を受けている国の医師らも、逆にアフリカなどへ救援に駆け付ける。「一緒に汗を流すこと」で、国籍を超えた仲間意識ができる。それが日本、ひいては岡山に返ってくる」というのがAMDA流だ。

市民レベル

AMDAの会員は、医師など医療関係者や一般市民で国内約千人、海外は約二

「熱き人々」